Quarterly Report

VOL.44

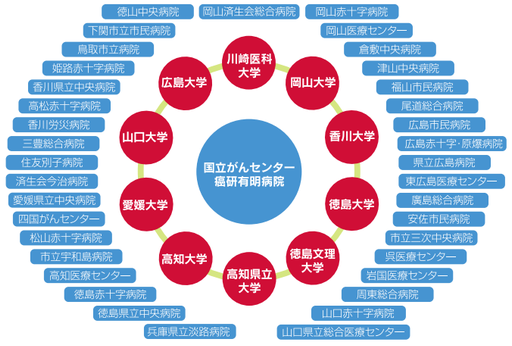
2015. Nov

Managing Office
2-5-1, Shikata-cho, Kita-ku
Okayama 700-8558 Japan
Phone:086-235-7023 Fax:086-235-7552
http://www.chushiganpro.jp/

Mid-West Japan
Cancer Professional Education Consortium
中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム

趣旨・組織

がんは、わが国の死亡率第１位の疾患ですが、がんを横断的・集学的に診療できる専門家が全国的に少なく、その養成が急務とされています。また、近年の高度化したがん医療の推進は、がん医療に習熟した医師、薬剤師、看護師、その他の医療技術者等（メディカルスタッフ）の各種専門家が参画し、チームとして機能することが何より重要です。そのため、がん医療の担い手となる高度な知識・技術を持つがん専門医師及びがん医療に携わるコメディカルなど、がんに特化した医療人の養成をおこなうため、大学病院等との有機的かつ円滑な連携のもとにおこなわれる大学院のプログラムが「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」です。



中国・四国全域に広がる拠点病院

組織的・効率的ながん治療の均てん化の実行組織

:コンソーシアム参加がん診療連携拠点病院

ごあいさつ

本プランは、中国・四国地域に位置する10大学がひとつのコンソーシアムを作り、各大学院に多職種のがん専門医療人養成のためのコースワークを整備し、これに地域の37のがん診療連携拠点病院が連携することにより、広い地域にムラなくがん専門医療人を送り出すことを目的としています。

がんに関わる多職種の専門医療人が有機的に連携し、チームとしてがん診療ならびに研究にあたることができるよう職種間共通コアカリキュラムの履修を出発点として教育研修をおこないます。また、国内外のがんセンターと連携し指導的ながん専門医療人養成のためのファカルティ・ディベロップメント（FD）を連動させ、大学院教員の教育能力を強化しています。

各大学・地域の持つ特色を活かし、互いに補完・止揚する教育拠点を確立します。高度なレベルで標準化された共通コアカリキュラムおよびeラーニングによる域内統一教育（共育）と、大学間連携による大学、分野、職種をこえた専門職連携教育（協育）をおこないます。また、英語教育と海外先進施設との連携により国際的に活躍する医療人の養成と、地域医療機関・患者会との連携による在宅高齢者がん医療に貢献する専門医療人の養成をおこないます。これらの活動を通じて高度な専門知識に加え、チーム医療・リサーチマインドを身につけた全人的高度がん専門医療人が多数輩出され、中国・四国地域におけるがん治療の均てん化、標準化が実現され、各大学、地域における臨床研究や橋渡し研究の活性化を目指します。

当コンソーシアム事務局では、講演会、海外研修学生募集などの情報を広く発信することを目的としたクォータリーレポートを発行しています。

本誌をきっかけに、大学院入学や各種セミナーへの参加等をご検討いただければ幸甚に存じます。

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム
事務局

Whole Person Care ワークショップ報告

岡山大学大学院　保健学研究科
教授　松岡　順治

平成27年9月19日から20日の2日間にわたってカナダ、モントリオール、マギル大学からトムハッチンソン先生を招きWhole Person Care(WPC)ワークショップを行ったので報告する。

平成27年9月19日に岡山大学病院総合診療棟において講演会を行った。岡山県内を中心とする医療従事者37名の参加があった。講演はWhat is whole person care?と題してWPCの基本的考え方をお話しいただいた。参加者が常日頃から考えながらもやもやしていた全人的医療の概念を明確に言語化することにより、毎日の臨床を変え、自信をもって患者さんと家族の支援を行うことができるようになった。

平成27年9月20日には岡山大学Junko　Fukutake Hallにおいてワークショップをおこなった。中国四国の実教育に携わる大学教員を中心として27名の参加があった。谷本光音先生の開会の挨拶の後、ハッチンソン先生の講演でWhat is whole person care?の講演と質疑応答、京都大学恒藤暁先生のWPCの解説と質疑応答を行った。その後How to teach whole person careの講演が行われた。この中ではWPCをマギル大学でどのように教育しているかを紹介するとともに、WPCで重要なマインドフルネスという観念を示した。この日参加者は、マインドフルネスの実践方法としての瞑想を実体験した。また、ワークショップでは2組にわかれ、自身の施設においてWPCを教育するための問題点や方法について論議し、発表を行った。ハッチンソン先生の講演は収録が行われており、希望に応じてDVDの視聴も可能だが、その一部について概説する。

医療の目的はなにか？

医療者の行っている医療はなにを目的としているのであろうか。日本医師会は医療の目的を「患者の治療と人々の健康の維持もしくは増進」と定義している。ここでは医療は（病いをもつ）患者に対しては（病いを治す）治療をおこない、（病いをもたない人々に対しては）現在の健康を維持増進するように働きかけるものであると理解することができる。しかしながら、病いを治すことは時としてかなわないことがあり、医療に限界があることは誰もが知っている。さらに病いをもつ人の病いを治すことがすなわち毎日の生活の充実を意味することではないということは、医療者にとっては常識である。世界保健機関は1946年に「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいう。（日本WHO協会訳）」と定義している。

従って医療者の医療の目的は病いをもつもたないに関わらず、人々を本来の意味で健康に、すなわち人々を幸せにすることにあると考えるのが適当である。臨床家は常に医療の目的を意識し、我々の行っている医療が人々を幸せにしているかどうかを常に顧みながら医療をおこなうべきである。

21世紀の医療のパラダイムシフト Whole Person Care（WPC）

カナダ、マギル大学医学部では1999年から医学部教育において、Whole Person Care（WPC）を基本においた教育を行っている。「単に病気を診断し治療を行うだけではなく、がんをはじめとする治療困難な病気とともに生きる人々に寄り添い、癒し人となり得る医療従事者を育てる」ことを宣言し、実践している。このWPCの概念は医療のあり方の根本を変える可能性を秘めている。

WPCとは

WPCはCuringとHealingを同時に行う医療である（図1）。

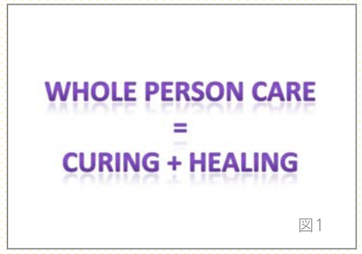


図1

Curing（治る）とHealing（癒る）

病いを克服する過程には2つあると考えられる。この概念がWPCの根幹をなしている。従来の医学においては患者は病いと一体であるから病いを治せば自然と患者も幸せになると考えてきた（図2）。

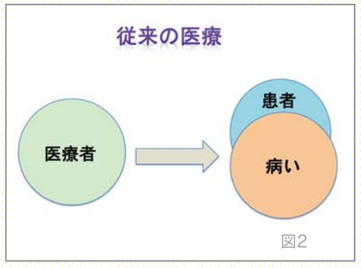


図2

病いを治療することによって一分一秒でも長く生き永らえれば、それで患者も幸せになると医療者も国民も信じてきた。これを達成するために様々な研究が行われ、その結果医学の進歩とともに生命の延長が可能となってきた。しかしながら、我々は今、単に生物学的に長く生きることがそのまま幸せにつながるものではないことを知っている。

WPCでは病いを持つ患者の治癒過程を（図3）のようにとらえている。すなわち病いを克服するにはCuring(治る)とHealing(癒る)が必要である。

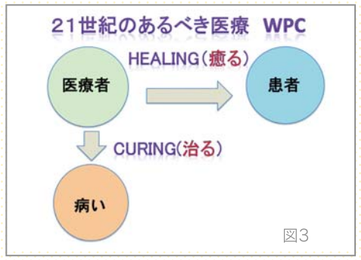


図3

CuringとHealingの関係は病いの時期や個人によって様々である。診断時あるいは早期においては病いの根治する可能性は高く、Curingが治療の主たる位置を占める。しかしながら、病いによる患者のつらさは医療者によるHealingのためのケアを必要とする。終末期になり病いそのものが進行し、根治する可能性が少なくなると、Curingの医療における役割は小さくなる。一方で、患者の様々なつらさは病いの進行とともに大きくなるため、そのつらさを癒すHealingが重要な位置を占めるようになる。

いずれの時期においても患者を健康で幸せにするためにはCuringとHealingを同時に行うことが大切である（WPC）。患者が本来の意味で健康（Healthy）であるためにはCureのみならずHealが必要なのである（図4）。

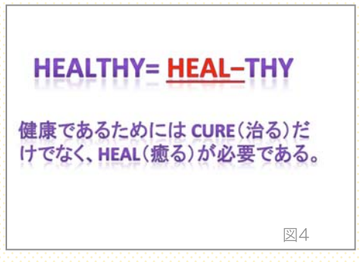


図4

CuringとHealingはどのように違うか

CuringとHealingを対比してみる(図5)。

CURING 治す	HEALING 癒す
・病を治療する	・病と対峙する
・現状の変化を拒否する	・現状の変化を受け入れる
・医療従事者が主導	・患者が主体
・現状の問題が関心事	・変わるのは患者
・サイエンス	・医療者は支援する
・体の安寧	・自身のあり方が関心事
	・哲学的
	・心の安寧

図5

従来の医学教育はCuringの技術のみを教えてきた。Curingとはすなわち病いを診断し、治療することである。悪いところがあればそれを治療し、元に戻すことがCuringである。患者は一分一秒でも長く生きることを願い、医療者もそれを是とする。Curingは医学の進歩により達成されるものであり、治癒を企図する試みである。このCuringの中に存在する我々の意識は変化を拒否する姿勢である。いままでと同じことができる体でありたい、いままでずっとあった病気のない体でありたいという望みである。一方、Healing(再甦)は病いという変化を受け入れ、積極的に新しい自分にかわっていこうという姿勢である。かわった自己はいままでとは異なる価値観のもとに存在し、病いすら積極的に受け入れる諦観の状況である。Cureはかわらないことをめざし、Healはかわることをめざす。CuringはEvidence Based Medicine(EBM)に基づいて行われ、患者が誰であっても標準的治療は変わらない。HealingはNarrative Based Medicine(NBM)に基づいて行われ、患者によって異なる個別治療が行われる。Curingは人工知能でも治療選択が可能であるが、Healingの支援は人工知能ではできない。CuringはScienceであり、HealingはArtである。Curingを主導するのは医療者であり、Healingを主導するのは患者である。

すべてのSufferingが病いを原因とするならば、病いを治すことにより患者も自然に幸せとなると考えられる。しかしながら、病いは治っても幸せでないこともある。病いを治すことと人を幸せにすることとは同一ではない。それではどうすれば医療は人々を幸せにすることができるのであろうか。それを解決する鍵となるのがHealingである。患者のHealingは病い、あるいは病いを持つ自分を見つめることからはじまる。病いの現状あるいは自分自身の現状を見つめそれを受け入れることがHealingをもたらす。WPCの中でEric J. CassellはBodies do not suffer, only persons do.と述べている。つらさを感じるのは心であって、体ではないのである。それであるが故に、病い(体)が篤くても心はつらくない状況、つまりHealingが存在しうる。ホスピスで死を前にした人々においては、陰鬱、つらい、寂しいという言葉とはうらはらの和やかな安寧の時間が流れている。このようにCuringとHealingは対立した概念ではあるものの、両立は可能でありそれを目指すのがWPCである。

がんプロにおけるWPCの位置づけについて

中国・四国高度がんプロ養成基盤プログラムにおいては、がんプロコンソーシアム協議会において、WPCを基本とした教育を行っていくことが決議された。WPCの概念が中国四国地区から全国にひろがり、医療の基本的概念として受け入れられる日がくるように期待している。またカナダ、マギル大学とも今後いっそう交流を深め、多方面における国際化を図ることが必要だと考える。ハッチンソン先生はきわめて温厚な紳士であり、岡山のあとは高松、高知をたずね仏教寺院にお参りされたようである。岡山滞在中は和食、焼き鳥、たこ焼きなどを楽しまれ、いつものように谷本先生主導のカラオケパーティで締めくくった。(少し外れてはいたが)声を張り上げて歌うハッチンソン先生をみると、歴史は夜つくられるという言葉が実感された。

国際貢献

中国・四国高度がんプロ養成基盤プログラム代表
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　谷本 光音

アジアからの招聘　～ミャンマー医療人～

ミャンマーのがん医療教育支援

がんプロ事業の一環としてミャンマーからの医療人の受け入れを開始してから今年で3年になります。これまでの3年間を振り返ってみますと、開始当初は当たり前のことですが、何かと初めてのことが多く、戸惑いながら各診療科で相談を重ねて進めて参りましたが、最近では少しずつ慣れてきて様々な希望にも具体的に応えられるようになってきたと思います。そしてこのことは、おそらくは研修に協力してくださる各診療科の皆さんもそしてがんプロスタッフの方々も同様に感じていることだと思います。

日本の大学は「国際化」を推進することが国際社会からも求められ、岡山大学にはSGU(スーパーグローバル大学)としての役割を果たすことが特に求められていますが、がんプロで行っているミャンマーのがん医療スタッフに対する教育研究支援も全く同じ役割のように思います。私たち大学のがん診療スタッフの教育の現場を体感していただくこと、そして同じ経験を持った医療人を一人でも多くミャンマーに作りだすことで、岡山大学の国際的な教育面での協力の枠組みの一環を為していきたいと考えています。

がんプロ事業の継続については次々年度以降どうなるかは未だ不明ですが、少なくとも来年度もミャンマーからの医療人を受け入れることで、SGUの実績として本事業の継続に繋げたいと思います。また、何よりミャンマーから来ていただく医療人の皆さんの真摯で熱心な姿に触れることは、私たちにとりましても大いに自己啓発に繋がっていると考えています。教える事は学ぶこと(Teaching is learning.)であり、そのことを実感できるがんプロの大切な事業を推進する一員として、今後もミャンマーの医療人の皆様のお役にたてる存在で有りたいと思います。

本事業の遂行にあたりましては、多くの皆様からご協力をいただき、心より感謝申し上げますと共に、ミャンマーのがん医療のさらなる発展を切望しております。

研修プログラム

2015.8.17-8.28

日程		研修内容	担当者
8.17	月	挨拶・病院紹介	がんプロメンバー
		谷本教授面会	谷本光音教授
		腫瘍センター	西森久和助教、久保寿夫助教
8.18	火	薬剤部	矢尾和久副薬剤部長
		松岡教授面会	松岡順治教授
		血液・移植カンファレンス	西森久和助教
8.19	水	放射線科外来見学	片山敬久助教
		放射線科外来見学	勝井邦彰助教、井原弘貴先生
		消化管カンファレンス	神崎洋光助教
8.20	木	精神科神経科外来見学	山田了士教授、小田幸治助教
		内視鏡、消化器がんについて	神崎洋光助教
8.21	金	看護部長面会	前川珠木看護部長
		がん登録	合地　明教授
		チーム医療合同演習 講演「臨床試験とCRC業務について」 「医師主導で行う臨床試験について」	香川大学、岡山大学
8.22	土	チーム医療合同演習 ワークショップ「臨床試験について」	香川大学、岡山大学
8.24	月	岡田教授面会	岡田裕之教授
		超音波検査・超音波下RFA治療	中村進一郎助教
8.25	火	総合患者支援センター	石橋京子主任専門職員(MSW)
		栄養管理	長谷川祐子副部長
		乳がんカンファレンス	岩本高行助教
8.26	水	血液腫瘍内科教授回診	西森久和助教
		緩和医療ケア見学と回診	南　大輔助教
8.27	木	内視鏡検査	神崎洋光助教
		病理部	田中健大助教
		造血幹細胞移植	西森久和助教
8.28	金	報告会	講演:松岡順治教授 報告者:Aye Sanda Nyunt

研修担当者より～ミャンマー医療人研修を終えて～

研修先：血液・腫瘍・呼吸器内科学
担当者：西森久和 助教

研修内容：
①外来化学療法室での抗がん剤投与の実際、②血液・腫瘍・呼吸器内科学の教授回診、③同種造血幹細胞移植の実際、④中国四国がんプロチーム医療合同演習を通したがん医療人の教育について関与させて頂きました。

感想：
ミャンマーにおいては、使用できる抗がん剤が日本に比べ限られているという現状や、検査機器、治療機器の不足している状況はこれまでの研修でも認識しておりましたが、今回はその中でも最適化された治療を施行していること、そしてサンダ先生ご自身がレジデントにも積極的に教育していらっしゃることを認識しました。
サンダ先生は、私たちが準備したすべてのプログラムにとても興味を示され、積極的にご質問をされていらっしゃいました。チーム医療合同演習における討論においても、言葉の壁を乗り越えて議論に参加し、討論内容の発表も積極的にされました。
私たちも積極的にこのような事業に関わり、意見を交わすことで新たな視点でがん医療と教育を見直し、今後に繋げていくことができるのではないかと思います。

研修先：臨床栄養部
担当者：長谷川祐子 副部長

研修内容：
がん患者の栄養管理及び抗がん剤治療の副作用における症状別の食事対応について当院の現状を伝え情報交換をし、実際の調理現場を見学していただきました。

感想：
サンダ先生が勤務されている病院には栄養士が不在のため、先生ご自身で輸液や経腸栄養をはじめ食事についても管理されていました。濃厚流動食については日本もミャンマーも同じように甘味を抑えた栄養剤を好む傾向であったことが興味深かったです。厨房見学では当院の食数の多さとHACCP（Hazard Analysis and Critical Control Point）に基づいた衛生管理に驚かれていました。ミャンマーでの食事がどのようにされているのか実際を知りたいと思いました。

研修先：看護部
担当者：前川珠木 看護部長

研修内容：
ミャンマーからエイ サンダニュン医師の訪問を受け、看護部管理室でも医療や看護の現状について情報を交換いたしました。

感想：
近隣諸国への医療人流出といった状況下で人材養成に取り組んでおられるとの事。喫緊の課題は医療機器の安全使用における指導者養成と伺い、日本からの支援の具体化が可能な領域ではないかと考えました。

ミャンマー医療人からのレポート～研修を終えて～

Pathein General Hospital
Consultant Medical Oncologist
Dr. Aye Sanda Nyunt

I attended and signed in the observership programme of the Faculty Development Course 2015 sponsored by the Mid-West Japan Cancer Professional Education Consortium at Okayama University Hospital. I was strongly convinced more knowledge on how the other hospitals and medical facilities in other countries provide and operate specific care in cancer treatment.

Attending the Joint Medical Practice at Takamatsu was found to be most interesting and participating as group member in workshop taught me a lot. I learned from the workshop how to create clinical trial protocols and holding group discussions and expertise from various specialties. I also try to make an atmosphere of multi-displinary discussions and joint-care to my cancer patients in my town.

After studying the Integrated Support Center for Patients in Okayama University Hospital, I tentatively start to introduce peer supporter group for breast and gastro-intestinal cancer patients at my hospital.

Because no nutritionist in my hospital, I got some ideas of nutrition for cancer patients from the Nutrition Dietary Department.

Although, some cannot be directly applied in my country, I have seen greater horizon of my specialty.

On evaluating my knowledge back in Myanmar, it is deeply instilled that I had to cope with research oriented attitude already established in Japan.

平成27年度 第1回がん高度実践看護師ＷＧ講演会開催

がん患者の治療・療養・生活過程を支える高度な看護実践の展開
～がんリハビリテーションと高度な看護実践～

日　時：平成27年7月12日（日）13:00～17:00
場　所：岡山コンベンションセンター 3階　コンベンションホール
参加者：355名

総合司会の秋元先生

総 合 司 会：秋元 典子（岡山大学大学院）
講演会司会：藤田 佐和（高知県立大学大学院）、雄西 智恵美（徳島大学大学院）

がん高度実践看護師WG講演会では、ケアとキュアの統合を根幹に5年間の全体テーマを「がん患者の治療・療養・生活過程を支える高度な看護実践の展開」とし、1年単位でシリーズ化した講演会を年2回企画しています。平成27年度は「がんリハビリテーションと高度な看護実践」をテーマに第1回講演会を開催し、がんリハビリテーションの基本的知識や患者支援とセルフケア支援の実際について、お二人の講師にご講演いただきました。

【講演者】
・辻　哲也 先生
　慶應義塾大学医学部　リハビリテーション医学教室　准教授
　慶應義塾大学病院　　リハビリテーション科　診療副部長
　「がん医療におけるリハビリテーションの役割と実際」
・花出　正美 先生
　がん研究会有明病院　がん看護専門看護師
　「がんリハビリテーションにおける看護師の役割とセルフケア支援」

辻　哲也先生

花出　正美看護師

司会の藤田先生と雄西先生

【終了報告】
第1回がん高度実践看護師ＷＧ講演会は、中四国全域から355名もの多くの方にご参加いただき、大変充実した会となりました。講演中は、参加者の熱心に聞き入る姿や学びを書き留める姿が多くみられ、看護職者の学ぶ姿勢とがんリハビリテーションにおける高度な看護実践への関心の高さを実感することができました。

がんリハビリテーションに積極的に取り組まれているお二人の講演を通して、がんと診断された早期から、治療のどの段階においても、そして患者の病状や状況、時期に関わらず、患者が自分らしく生きるためのサポートを行うことが看護師の役割として求められていることをリハビリテーションの視点から学ぶことができました。また、看護師は患者の生活を援助する支援者としてチームで協働しながら患者を支える役割を発揮していくことの重要性を再認識することができました。
参加者からは、「リハビリを狭義の意味でしか理解できていなかったので今後はケアに活かせると思う」「他職種との連携やリハビリができるような環境に整えていきたい」「チームでサポートする事の大切さを感じることができた」「セルフケアのいろいろな理論やモデルを教えていただいたので、臨床の場でアセスメントする時に役立てたい」など、多くの意見を頂きました。

【全体のサマリー】
辻　哲也 先生
辻先生のご講演では、がんサバイバーの増加に対し、がんによる身体障害に対する障害の軽減、ADLの改善を目的としたがんリハビリテーションの必要性が増大しているが、がん診療連携拠点病院においてリハビリテーションを実施している割合は65.1％であることが示されました。がんリハビリテーションには、病期別の目的として、がんの診断後、早期に開始し機能障害の予防を目的とする予防的リハビリテーション、治療開始に伴う機能障害、能力低下の存在する患者に対して、最大限の機能回復を図る回復期リハビリテーション、再発、転移が見つかり、腫瘍が増大、機能障害が進行しつつある患者のセルフケア、運動能力を維持・改善することを試みる維持期リハビリテーション、末期のがん患者に対して、その要望を尊重しながら、身体的、精神的、社会的にもQOLの高い生活が送れるように援助する緩和的リハビリテーションがあることが説明されました。

会場の様子

会場の様子

がんリハビリテーションの基本的な知識と病期別のリハビリテーションの実際について周手術期から予防・回復・維持的、緩和的なリハビリテーションの具体例を示してご講演をしていただきました。進行がん、末期がん患者のリハビリテーションにおいては、「余命の長さにかかわらず、患者とその家族の要望を十分に把握した上で、その時期におけるできる限り可能な最高のADLを実現する」ことの重要性について強調されました。具体的には、残存能力の維持に加え福祉機器である車椅子や杖、自助具を活用した生活や、移動動作のコツを習得し、ADL・基本動作・歩行の安全性の確立、能力向上ができ、より良い生活が送れるよう整える。また、症状マネジメントとして、浮腫の改善や症状緩和、疼痛緩和、呼吸苦の改善など身体の苦痛緩和を行っていく。症状マネジメントと並行して、心理支持としてのアクティビティーや日常会話や訪室といった取り組みを行うことで、患者・家族に残された時間が有意義なものとなるように医療チームで支援することが重要であることを紹介していただきました。そして、緩和ケア主体の時期におけるリハビリテーションは日常生活や療養生活の質向上に有用となるよう支援することが重要であり、患者・家族のニーズに沿ったリハビリテーションを提供することが医療者に求められていると述べられました。これらのことから、看護師が臨床で実践しているリハビリ看護と講義を通して学んだリハビリテーションの知識や支援の実際とを照らし合わせることで、明日から活かせる援助の示唆を得ることができました。講演の最後に看護師に向けて“患者の生活を支援する中でリハビリニーズを捉える目を持ち、チームで協働して患者のQOLを維持向上させる調整役になってくれることを期待しています” とメッセージをいただきました。

花出　正美 先生
がんリハビリテーション看護は、がんそのものや治療によってもたらされた障害や生活上の困難を抱える人々が、身体・心理・社会的な機能を最大限に回復・維持し、QOLを実現するプロセスであると説明され、日頃実践している看護ケアがリハビリテーションの定義となっていると述べられました。そして、具体的な事例を通してがんリハビリテーション看護における患者の支援プロセスを丁寧に紹介していただきました。
下咽頭がんで永久気管孔を増設した患者のリハビリテーションでは、永久気管孔のセルフケアとして、管理や安全な日常生活の支援、排便コントロール、コミュニケーションへの支援など術後の生活の変化に患者が馴染むまで継続した看護を提供していくことの必要性を説明いただきました。また、多発骨転移・圧迫骨折・下肢麻痺を経験している患者に対して、動けないことに対する患者の心的つらさにコミットメントしながら、傾聴、語りの促進、支持的支援を通して患者の思いを確認・共有することが求められていること、そして、チームで協働し患者・家族の希望を尊重しながら生活の中にリハビリテーションを取り入れることで、脊椎への負荷が少ない介助による車椅子移動の習得が可能となり、患者や家族の負担を軽減しながら希望を支える看護が実現できることを学ぶことができました。これらのことから、がんリハビリテーションにおける看護師の役割とセルフケア支援の重要性や、自宅の環境を想定した患者の療養が支援できるように入院中から環境を調整していくことの必要性を学ぶことができました。

患者教育として、健康の回復・維持・増進あるいは自立を促すという目標に向けて各人が行動変容を起こすよう、各人のニードに基づいた系統的・計画的な学習の機会を設け、看護師が患者と共に計画し、実施する必要性について説明していただきました。より良い患者教育につなげていくために、セルフケア支援が必要となってくることを理解することができました。セルフケア支援では、Ajzenの計画的行動理論、Beckerの健康信念モデルなど理論やモデルを数多くご紹介いただき、明日からの看護実践、事例のアセスメントに活用できる貴重な学びとなりました。

講演会司会の藤田先生

受付の様子

がんリハビリテーションにおける看護師の役割は、患者の生活に焦点を当て、身体的、心理的、社会的ニーズを把握し、多職種に働きかけながら、患者・家族と一緒にリハビリテーション計画について検討し、目標を共有して一緒に取り組むことが患者のニーズに即した具体的な計画につながると述べられました。そして、動機づけの維持・強化を図りながら患者・家族を見守っていることをメッセージとして伝えながら、期待されるリハビリテーションの効果に患者・家族が関心を寄せるように導く看護が重要であると説明されました。また、セルフケア能力の維持・強化として、患者・家族のセルフケア能力を見極めながら、必要時には代償し日常生活の安全・安楽を保証し、セルフケアに必要な知識・技術を教育していく必要があること、そこには、家族の適切なサポートが促進されるよう家族の苦労や思いを労いながら具体的なサポート方法を提案していく看護が求められることが理解できました。さらに、リソースを活用できるよう情報提供し、必要時にはそれらにつなぐなど、患者・家族の不安への的確な対応が重要であると説明されました。これらのことから、がんリハビリテーション看護の役割として、患者・家族の教育、セルフケア支援にとどまらず、多職種と協働しながら患者の希望を支えるために、チーム内でリーダーシップを発揮できるように役割を担っていくことが重要であると実感することができました。

【参加者アンケート結果】

参加者355名のうち231名（回答率65.1%、中国78.9%、四国19.1%、その他0.4%）から回答をいただきました。アンケートの結果、93.9%の参加者が、メインテーマ「がん患者の治療・療養・生活過程を支える高度な看護実践の展開」について関心を持って参加されていました。50.6%の参加者が都道府県がん診療連携拠点病院および地域がん診療連携拠点病院に所属していました。そして、96.1%の参加者が、がん患者の治療・療養・生活過程を支える高度な看護実践の展開について具体的に理解することができ、93%の参加者が満足されていました。これらの結果から、がんリハビリテーションに関する参加者の関心は高く、満足度の高い講演会であったと考えます。さらに、多くの参加者が、「がん看護の専門的な学習を深める動機づけになった（97.9%）」、「がんのキャリアアップを目指す動機づけになった（84.4%）」と回答しており、37.8%の参加者がが看護専門看護師の資格を取りたいと思っていることから、高度な看護実践やがん看護への興味・関心の高さが伺え、キャリアアップへの動機づけにもなっていると考えられます。

今回の講演会で役立つと思われた内容について、「リハビリの目的・重要性・必要性に関するもの」「知識の獲得に関するもの」「リハビリの時期に関するもの」「治療とリハビリに関するもの」などの12項目が挙げられており、参加者ががんリハビリテーションにおける高度な看護実践を考える上で、個人のニーズを満たす講演会であったと考えます。今後の講義内容に関する希望では、がん患者・家族への支援として地域連携や退院調整、在宅支援、がん告知時からの関わり、Badニュースの伝え方、意思決定支援、不安を語られたときの対応、CNSの活動の実際などの意見を頂きました。また、苦渋した事例の紹介やチーム医療の実際など、現場での看護に還元できる内容、明日からの看護の示唆が得られる内容に期待が大きいことが伺え、今後の企画に活かしていきたいと考えます。アンケート結果から実践への学びにつながる有意義な講演会であったと評価することができました。今後も、参加者の高度な看護実践につながるような講演会を開催していきたいと考えております。また、平成27年度も、年2回の講演会に参加して頂いた方に参加証明書を発行いたします。

第2回講演会は12月19日（土）に岡山コンベンションセンターにおいて開催予定です。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

文責：高知県立大学大学院看護学研究科　藤田　佐和

活動報告

徳島 Seminar on Medical Physics in Tokushima

「放射線治療における画像診断技術」Imaging Technologies in Radiation Therapy

日　時：平成27年2月21日（土）　14:00～17:00
場　所：徳島大学蔵本キャンパス内　青藍講堂
参加者：34名

司会　徳島大学　富永 正英

「放射線治療計画におけるCT画像」
徳島大学病院　佐々木 幹治 先生

「治療計画に必要なMRI撮像技術について」
福井大学医学部附属病院　金本 雅行 先生

「PET/CTと放射線治療－現状と課題－」
倉敷中央病院　松友 紀和 先生

「放射線治療を支援する医用画像解析技術」
九州大学　有村 秀孝 先生

総合討論

終了報告

放射線治療分野における種々の画像診断技術を議論する良い機会となり、大変有意義であった。

愛媛 第3回 愛媛大学がんプロフェッショナル養成インテンシブコース講習会

日　時：平成27年2月27日（金）　18:00～19:00
場　所：愛媛大学医学部　臨床第2講義室
参加者：25名

座長　愛媛大学医学部
肝臓・胆のう・膵臓・移植外科　教授　高田 泰次

演題　**「肝癌のCUREを求めて」**
日本大学医学部消化器外科　教授　高山 忠利

終了報告

高山忠利先生は、国立がん研究センター中央病院ならびに東京大学医学部、更に現在所属されている日本大学医学部で、長く肝腫瘍の臨床（手術療法）と臨床研究に携わってこられた腫瘍外科医で、世界に先駆けて開発した独自の肝腫瘍摘出術と、様々な肝がん患者の治療法の開発に携わってこられました。外科医でありながら、肝がん患者の末梢血からLAK細胞を培養して術後患者に投与するといった免疫療法の開発、更に現在行われている術後管理の臨床研究等、手術以外にも様々な臨床研究への興味や意欲を、ご自身の経験を踏まえ講演されました。また、最近高山先生が医療監修された、NHKドラマ「はつ恋」の撮影現場の話なども話題に盛り込み、多方面の情報提供が為されました。当日は多くの医療者が参加し、互いの議論が行われ、有意義な講演会となりました。

徳島 臨床腫瘍地域医療学コース(インテンシブ)第7回地域医療セミナー

西部地域とのがん診療連携
～患者さんの安心のために～

日　時:平成27年3月12日(木)　18:45～20:35
場　所:徳島県立三好病院　5階　講義室
参加者:50名

司会進行　徳島大学病院　がん診療連携センター
がん診療連携・相談副部門長　鳥羽 博明 先生
開会ご挨拶　徳島大学病院　がん診療連携センター
がん診療連携・相談部門長　金山 博臣 先生
三好市医師会　会長　田岡 清三郎 先生
ご挨拶　徳島大学病院　がん診療連携センター
センター長　福森 知治 先生

第1部
座長　徳島大学病院　地域外科診療部　特任教授　居村 暁 先生
「胃癌の最新化学療法」
徳島大学病院消化器内科　講師　宮本 弘志 先生
「大腸癌に対する低侵襲外科治療」
徳島大学病院消化器・移植外科　助教　東島 潤 先生
「なぜ、我が国の肝がん治療は世界一なのか？～内科的治療を中心に～」
徳島大学病院消化器内科　助教　谷口 達哉 先生

第2部
座長　徳島大学病院泌尿器科　教授　金山 博臣 先生
「肺癌薬物療法の進歩と個別化医療」
徳島大学病院呼吸器・膠原病内科　准教授　埴淵 昌毅 先生
「乳癌診療における最近の話題」
徳島大学病院食道・乳腺甲状腺外科　助教　中川 美砂子 先生
「前立腺癌の最新治療の現状」
徳島大学病院泌尿器科　講師　福森 知治 先生

第3部
座長　徳島大学病院泌尿器科　教授　金山 博臣 先生
「県立三好病院がん医療」
徳島県立三好病院　病院長　住友 正幸 先生

閉会ご挨拶　美馬市医師会　会長　谷口 博美 先生

終了報告

今回のセミナーは、徳島大学病院、中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム主催、徳島県立三好病院、美馬市医師会、三好市医師会、つるぎ町立半田病院、市立三野病院の共催のもと、徳島大学病院と徳島県西部地域のがん診療連携をさらに発展させるために開催された。今回は、「胃癌の最新化学療法」「大腸癌に対する低侵襲外科治療」「なぜ、我が国の肝がん治療は世界一なのか？～内科的治療を中心に～」「肺癌薬物療法の進歩と個別化医療」「乳癌診療における最近の話題」「前立腺癌の最新治療の現状」「県立三好病院がん医療」の７演題について講演があり、各種がんの診療連携が深められた。

広島 第34回 広島大学病院放射線治療講演会

日　時:平成27年3月20日(金)　8:00～
場　所:広島大学病院　診療棟　地下1階　放射線治療センター
参加者:12名

司会:広島大学病院放射線治療科　教授　永田 靖

“RT and immunotherapy or molecular targeted treatment for lung cancer”
M.D.Anderson Cancer Center
Ritsuko Komaki, MD

岡山 第1回 岡山大学がん放射線科学コース(インテンシブコース)セミナー

日　時:平成27年4月7日(火)　19:00～20:30
場　所:岡山大学病院　総合診療棟5F　第5カンファレンスルーム
参加者:5名

座長　岡山大学病院医療技術部　放射線部門　青山 英樹

「放射線治療品質管理基礎技術1(物性)」
岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

フリーディスカッション

終了報告

本セミナーは、インテンシブコースとして市内の関連病院や院内スタッフ・大学院生等を対象に、海外の教科書(Physics of Radiation Therapy)を用いて系統立てたセミナーを企画している。
今回のセミナーではChapter1を中心に、原子の構成と特徴、原子核の状態、量子力学の基礎などについて解説がなされました。大学院相当の内容にもかかわらず、社会人の参加者も含めて熱心に英語を読み説く姿勢が見られ、盛況裡に終わりました。

岡山 第2回 岡山大学がん放射線科学コース(インテンシブコース)セミナー

日　時:平成27年4月21日(火)　19:00～20:30
場　所:岡山大学病院　総合診療棟5F　第4カンファレンスルーム
参加者:7名

座長　岡山大学病院医療技術部　放射線部門　青山 英樹

「放射線治療品質管理基礎技術2(原子核物理)」
岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

フリーディスカッション

終了報告

本セミナーは、インテンシブコースとして市内の関連病院や院内スタッフ・大学院生等を対象に、海外の教科書(Physics of Radiation Therapy)を用いて系統立てたセミナーを企画している。
今回のセミナーでは第2回目としてChapter2を中心に、放射能と壊変、放射平衡、核反応、放射化、核分裂などについて解説がなされました。大学院生が参加者の大部分を占めたが、全員、熱心に英語を読み説く姿勢が見られました。
今年度より海外の教科書を用いて系統立てられたセミナーが企画され、英語の内容を通じて議論を深めながら進められました。大学院生は、放射線治療の専門的内容がまだわからないことも多く、また海外の教科書では必要とされる専門知識が日本の教科書に比べて様々な背景から記述されているので、解説を通じて理解を深めることができました。臨床でも海外の情報を得ることが重要との話から、海外と同等に学ぶことは有意義だと思います。ディスカッションでは問題演習などの解説を通じて、専門資格の取得に向けた勉強と対策に有用でした。

岡山 第3回 岡山大学がん放射線科学コース(インテンシブコース)セミナー

日　時:平成27年5月12日(火)　19:00～20:30
場　所:岡山大学病院　総合診療棟5F　第4カンファレンスルーム
参加者:12名

座長　岡山大学病院医療技術部　放射線部門　青山 英樹

「放射線治療品質管理基礎技術3(放射線の特性)」
岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

フリーディスカッション

終了報告

本セミナーは、インテンシブコースとして市内の関連病院や院内スタッフ・大学院生等を対象に、海外の教科書(Physics of Radiation Therapy)を用いて系統立てたセミナーを企画している。今回のセミナーでは第3回目としてChapter3を中心に、X線管の構造、X線発生回路、電圧整流、X線物理、出力特性などについて解説がなされました。大学院生が参加者の大部分を占めたが、全員、熱心に英語を読み説く姿勢が見られました。

岡山 第1回 岡山大学がん放射線科学コース(インテンシブコース)実習型セミナー

日　時:平成27年5月19日(火)　19:00～21:00
場　所:岡山大学大学院保健学研究科　総合教育研究棟8F　リフレッシュルーム
参加者:8名

座長　岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

「3次元放射線治療計画装置(RayStation)の特徴と臨床運用について」
株式会社日立メディコ　X線治療システム本部　治療システム営業部　風戸 章吾　様

質疑および実習

終了報告

本セミナーは、実習型インテンシブコースとして市内の関連病院や院内スタッフ・大学院生等を対象に、3次元放射線治療計画装置(RayStation)を用いて実機型のセミナーを企画した。
今回のセミナーでは放射線治療計画装置の基本的な機能から実際の臨床応用に至るまで、その多機能性や新しい技術応用などについて詳しく解説・実演がなされました。最先端の臨床的内容にもかかわらず、社会人の参加者も含めて熱心に議論がなされ、盛況裡に終わりました。

参加者から

実機型のセミナーということで今回参加しましたが、IMRTやVMATでの最先端放射線治療において、実演して頂いた計画装置は従来と比べて、格段に進歩した機能が搭載されていることを確認できました。
放射線治療計画装置は医療事故の観点からも、実際の導入に至るまでのプロセスが特に重要であり、その際に必要とされる物理計測や管理の知識についても詳しく解説して頂きました。こうしたセミナーを通じて、新しい情報を学べることは有意義だと思います。

岡山 第4回 岡山大学がん放射線科学コース(インテンシブコース)セミナー

日　時:平成27年5月26日(火)　19:00～20:30
場　所:岡山大学病院　総合診療棟5F　第4カンファレンスルーム
参加者:6名

座長　岡山大学病院医療技術部　放射線部門　青山 英樹

「放射線治療品質管理基礎技術4(放射線発生器の特性)」
岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

フリーディスカッション

終了報告

本セミナーは、インテンシブコースとして市内の関連病院や院内スタッフ・大学院生等を対象に、海外の教科書(Physics of Radiation Therapy)を用いて系統立てたセミナーを企画している。
今回のセミナーでは第4回目としてChapter4を中心に、X線治療の歴史、低エネルギーX線治療装置の応用、高エネルギーX線発生加速器の応用、放射性核種による放射線治療、粒子線治療の歴史と応用などについて解説がなされました。

岡山 第5回 岡山大学がん放射線科学コース(インテンシブコース)セミナー

日　時:平成27年6月9日(火)　19:00～20:30
場　所:岡山大学病院　総合診療棟5F　第4カンファレンスルーム
参加者:7名

座長　岡山大学病院医療技術部　放射線部門　青山 英樹

「放射線治療品質管理基礎技術5(電離相互作用)」
岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

フリーディスカッション

終了報告

本セミナーは、インテンシブコースとして市内の関連病院や院内スタッフ・大学院生等を対象に、海外の教科書(Physics of Radiation Therapy)を用いて系統立てたセミナーを企画している。
今回のセミナーでは第5回目としてChapter5を中心に、放射線の物理特性、光子・中性子・荷電粒子の相互作用などについて解説がなされました。大学院生が参加者の大部分を占めたが、全員、熱心に英語を読み説く姿勢が見られました。

山口 第1回 がん治療スキルアップコース(インテンシブ)セミナー

FD研修報告会

日　時:平成27年6月12日(金)　18:00～19:00
場　所:山口大学医学部霜仁会館(記念会館)3F　多目的室
参加者:9名

司会:山口大学医学部附属病院　腫瘍センター　吉野 茂文 先生

講演Ⅰ:**「聖路加国際病院のFD研修について(外科医の立場から)」**
山口大学医学部附属病院　第2外科　前田 訓子 先生
講演Ⅱ:**「聖路加国際病院のFD研修について(看護師の立場から)」**
山口大学医学部附属病院　看護部　本田 紫子 先生
講演Ⅲ:**「聖路加国際病院のFD研修について(看護師の立場から)」**
山口大学医学部附属病院　看護部　角谷 博美 先生
講演Ⅳ:**「米国モフィットがんセンターのFD研修について」**
山口大学　大学教育機構(保健管理センター)松原 敏郎 先生

終了報告

この度、聖路加国際病院のFD研修に参加した医師1名・看護師2名と米国のモフィットがんセンターのFD研修に参加した医師1名による報告会が行われた。
最初に、外科医師の前田訓子先生から聖路加国際病院のカンファレンスや遺伝診療部について外科医の立場から報告があり、会場では、医療関係者と乳がん手術などに関して活発な意見交換がなされた。
次に、看護師の本田紫子先生から聖路加国際病院のブレストケアセンターとオンコロジーセンターの様子について報告があった。ブレストケアセンターのカンファレンスについて、さまざまな職種から意見が出しやすい雰囲気で、それが患者により良い医療を提供することにつながっているのではないかと述べられた。
続いて、看護師の角谷博美先生から聖路加国際病院では多くのグループ療法がおこなわれているとの報告があった。その中でも、がん患者の外見のケアを行う「ビューティーリング」について実際の写真やイラストを用いて詳しく話され、学んだことを今後の患者指導に活かしていきたいと述べられた。
最後に、松原敏郎先生から米国のモフィットがんセンターでの研修について報告があった。緩和ケアを実施するうえで、抱えている疑問は日本もアメリカも同じであると述べられ、患者の幸福度を上げるための医療であるという信念を持ち、早期からの患者への介入、多職種の連携が重要であると締めくくられた。

岡山 第6回 岡山大学がん放射線科学コース(インテンシブコース)セミナー

日　時:平成27年6月23日(火)　19:00～20:30
場　所:岡山大学病院　総合診療棟5F　第4カンファレンスルーム
参加者:8名

座長　岡山大学病院医療技術部　放射線部門　青山 英樹

「放射線治療品質管理基礎技術6(線量計の特性)」
岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

フリーディスカッション

終了報告

本セミナーは、インテンシブコースとして市内の関連病院や院内スタッフ・大学院生等を対象に、海外の教科書(Physics of Radiation Therapy)を用いて系統立てたセミナーを企画している。
今回のセミナーでは第6回目としてChapter6を中心に、放射線量の単位、電離箱の構造、電位計の構造、電離箱線量計を利用した電離放射線の計測法などについて解説がなされました。大学院生が参加者の大部分を占めたが、全員、熱心に英語を読み説く姿勢が見られました。

山口 第2回 がん治療スキルアップコース(インテンシブ)セミナー

第5回宇部・小野田圏域緩和ケア事例検討会

日　時:平成27年6月25日(木)　17:30～18:30
場　所:山口大学医学部霜仁会館3階　多目的室
参加者:96名

開会挨拶:山口大学医学部附属病院　腫瘍センター
准教授　吉野 茂文 先生

司会:山口大学医学部附属病院　診療連携室
結城 美重 看護師長

「大学病院から在宅緩和ケア、一般病院で看取りを迎えた乳がん症例
ー骨転移や上腕リンパ浮腫によりADLが低下した患者を支えるためにー」
山口大学医学部附属病院　腫瘍センター　松元 満智子 先生
山口大学医学部附属病院　看護部　宮内 貴子 先生
小野田赤十字病院　副院長　佐藤 智充 先生

終了報告

この度、第5回宇部・小野田圏域緩和ケア事例検討会が山口大学医学部霜仁会館3階多目的室で開催された。切れ目のない緩和ケアを実現するために、事例検討を通じて顔の見える緩和ケア連携体制の構築及び連携強化を図ることを目的とし、附属病院の職員の他にも、院外の医師、看護師、MSW、訪問看護師と様々な職種の方々が96名参加された。
当院の吉野茂文腫瘍センター副センター長より開会の挨拶があり、当院の診療連携室の結城美重看護師長を司会として、各施設より事例提示があった後、ディスカッション形式で全体討議を行った。
参加者からは、「他施設の現状などが知ることができてよかった。」「他職種が、いろいろな立場で関わった話を聞けて、とてもよかったと思います。」「患者だけでなく、患者家族を巻き込んだケアの重要性を認識しました。」「大変参考になりました。次回も参加したいと思います。」など多くの意見が寄せられ、有意義な検討会となった。

岡山 第1回 岡山大学がん放射線科学コースインテンシブコース地域連携セミナー（大学院公開講座）

日　時：平成27年6月27日（土）　13：00～18：20
場　所：岡山大学大学院保健学研究科　保健学科棟3F　301室
参加者：6名

司会：岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇
講師：広島大学大学院医歯薬保健学院応用生命科学部門
（放射線腫瘍学）　西尾 禎治 先生

「放射線計測学1」
「放射線計測学2」
「放射線治療線量計算1」
質疑応答

終了報告

本セミナーは、毎年開講している大学院保健学研究科「放射線治療管理学特論」の一部を公開形式としてジョイント開催された。広島県からの参加があったが、粒子線治療は中国四国地区の臨床現場ではまだ1施設も導入されていないこともあり、参加者は少なかった。講義では基礎から応用まで幅広く、有意義な内容であり、医学物理士試験の対策にも有用であるが、7月にも同様の内容が企画されているので、次回はさらに多数の参加者が集うように周知させていきたい。

愛媛 第1回 愛媛大学がんプロフェッショナル養成インテンシブコース講習会

日　時：平成27年6月30日（火）　18：00～19：30
場　所：愛媛大学医学部　臨床第2講義室
参加者：61名

Opening Remarks：愛媛大学医学部医学系研究科　皮膚科学　教授　佐山 浩二

特別講演1　座長　愛媛大学医学部附属病院総合診療サポートセンター　看護師長　三好 真寿美
「がんとお金の話」
演者　愛媛大学医学部附属病院総合診療サポートセンター　医療福祉連携推進部門　MSW　小野 恵子

特別講演2　座長　愛媛大学大学院医学系研究科　皮膚科学　講師　白石 研
「メラノーマに対する分子標的薬の話」
演者　国立がん研究センター中央病院　皮膚腫瘍科　科長　山﨑 直也

Closing Remarks：愛媛大学医学部医学系研究科　臨床腫瘍学　教授　藥師神 芳洋

終了報告

本講演会は、BRAF遺伝子変異に対する分子標的薬、免疫チェックポイント（PD-1、CTLA4）を標的とした抗体製剤など新薬が次々と市販され、目まぐるしい変化・進歩がみられる悪性黒色腫治療をテーマとして企画されました。
特別講演1では、メディカルソーシャルワーカーである小野恵子先生に、新規抗がん剤が抱える医療費の高騰といった諸問題、高額療養費制度、傷病手当制度などをわかりやすく解説していただきました。
特別講演2では、国立がんセンター中央病院の山﨑直也先生に、「悪性黒色腫の分子標的薬」というテーマで、悪性黒色腫の病態、遺伝子異常とその検査方法、悪性黒色腫の標準治療、さらには新規抗がん剤であるVemurafenib（BRAF阻害剤；商品名ゼルボラフ）投与方法、有害事象対策などを幅広く講演していただきました。本講演会は、医師のみならず看護師・薬剤師など幅広い職種の参加と共に、終了後も活発な質疑応答があり有意義な講演会でした。

高知 第4回 インテンシブコース（在宅がん医療・緩和医療）集中セミナー

テーマ：がん在宅移行期・終末期における地域の抱える問題点

日　時：平成27年7月4日（土）　13：30～17：00
場　所：高知県立あき総合病院 2階　やまのホール
参加者：36名

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム　理事
高知大学医学部附属病院　がん治療センター　部長　小林 道也

総合コーディネーター（在宅がん医療ＷＧリーダー）
高知大学医学部医療学（公衆衛生学）　講師　宮野 伊知郎

■開会挨拶
■ワークショップ説明・アイスブレイク
■多職種によるワークショップ：2症例　（ワールド・カフェ方式）
症例提示・ディスカッション・シェア
■まとめ
■閉会挨拶・アンケート回収

終了報告

今回初めて県東部地域での開催となりましたが、ほぼ定員の36名の医療従事者に参加いただきました。
今年度は、開催地域および高知中央地域で実際に活躍している方から、自身が経験した“後悔の残る事例や困難を感じた事例”について症例提示をしていただき、参加者は個人個人が感じたことやより良くするためにはどうしたらいいのかなどをワールドカフェ方式で話し合いました。
参加者からは「多職種の意見を聞ける良い機会となった」「ワールドカフェ方式は、色々な意見が出易くよかった」「来年もぜひ東部地域で開催してほしい」などの感想が聞かれ、大変好評を得ました。

高知 第7回 がんプロ国際セミナー

テーマ：地域医療について

日　時：平成27年7月7日（火）　18：30～
場　所：高知大学医学部　低侵襲手術教育・トレーニングセンター
参加者：22名

講演
ハワイ大学医学部（JABSOM）学生とがんプロ学生・高知大学医学部学生が、ハワイと高知の地域医療・在宅医療について英語でプレゼンテーションおよびディスカッションします。

終了報告

今回のセミナーでは、3演題についてすべて英語でプレゼンテーションおよびディスカッションを行いました。
参加者からは、「ハワイの地域医療に触れるいい機会となった」「英語を改めて勉強したい」などの感想が聞かれました。また、今回も連携大学の高知県立大学から教員および学生に参加していただきました。

Participation university

参加大学

Consortium　Member

川崎医科大学
Kawasaki Medical School

がん専門医養成コース
●学務課教務係
TEL(086)464-1012

岡山大学
Okayama University

がん専門医養成コース・がんプロ在宅高齢者緩和コース
精神腫瘍医コース
●医歯薬学総合研究科等学務課教務グループ大学院担当
TEL(086)235-7986

がん専門・指導薬剤師養成コース
●医歯薬学総合研究科等薬学系事務室教務学生担当
TEL(086)251-7923

高度実践看護師（がん看護）コース
がん放射線科学コース
●医歯薬学総合研究科等学務課教務グループ保健学研究科担当
TEL(086)235-7984

広島大学
Hiroshima University

がん専門医養成コース
がん専門薬剤師養成コース
がん看護高度実践看護師養成コース
医学物理士養成コース
●医歯薬保健学研究科等学生支援グループがんプロ事務室
TEL(082)257-1538

香川大学
Kagawa University

腫瘍内科系専門医養成コース
緩和医療専門医養成コース
腫瘍外科系専門医養成コース
放射線治療専門医コース
●医学部総務課学務室大学院入学試験係
TEL(087)891-2074

山口大学
Yamaguchi University

腫瘍外科アドバンスコース
腫瘍内科アドバンスコース
放射線治療アドバンスコース
研修医腫瘍専門医コース
高度実践看護師（がん看護）コース
●医学部学務課大学院教務係
TEL(0836)22-2058

徳島文理大学
Tokushima Bunri University

がん専門薬剤師履修コース
●香川キャンパス庶務渉外グループ
TEL(087)894-5111

愛媛大学
Ehime University

臨床腫瘍学教育課程がん専門医養成コース
●医学部学務課大学院チーム
TEL(089)960-5868

徳島大学
Tokushima University

臨床腫瘍内科学コース・臨床腫瘍放射線医学コース
臨床腫瘍外科学コース・臨床腫瘍栄養学コース
●医歯薬事務部学務課大学院係
TEL(088)633-9649

臨床腫瘍薬剤師コース
●医歯薬事務部薬学部事務室学務係
TEL(088)633-7247

臨床腫瘍看護学コース・医学物理学コース
●医歯薬事務部学務課第二教務係
TEL(088)633-9009

高知県立大学
University of Kochi

がん高度実践看護師（APN）養成コース
●学生課大学院担当
TEL(088)847-8580

高知大学
Kochi University

臨床腫瘍医内科系コース
放射線治療専門医コース
臨床腫瘍医外科系コース
がん専門薬剤師養成コース
医学物理士養成コース
●医学部・病院事務部学生課大学院担当
TEL(088)880-2263

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム　Vol.44

□ 編集兼発行者
中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム事務局
TEL 086－235－7023　info@chushi.ganpro.jp

□ 印刷所
有限会社 ファーストプラン